
ななつぼしとぼく

新垣 真那

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ななつぼしとぼく

【Nコード】

N0636M

【作者名】

新垣 真那

【あらすじ】

「僕」の日常は何もなく進んでいく。

寝坊して、バイトを首になって、また新しいバイトをさがしに町へ行く。

そんな「僕」の一日

（前書き）

小説家になろうの使い方を把握するためにほとんど即興で書いています。

その日、僕が起きた時には既に太陽は空高く昇っていた。

閉じたカーテンの隙間から部屋に差し込む光を見て、既に明るくなつた外の様子が窺える。

しまつた、寝坊した。直感的にそう感じた。

僕はすぐに枕元でランプが点灯している携帯を手に取り、恐る恐る開くと予想通り、バイト先から数件電話がかかってきていた。

寝る前にマナーモードを解除しておくのを忘れてた。

ああだから目覚まし時計を買うべきだつただろう。

数日前に目覚ましなんて携帯のアラームで十分だろうなんて言っていた僕を殴ってやりたい。

バイト先に謝りの電話を入れる前に心を落ち着けようと、僕は枕元の煙草の箱を手に取る。

しかし、箱の中身は空っぽだった。

ああ、そういえば昨日の夜に全部吸ってしまったんだつた。

何か悪いことがあるときはいつもこうだ。

空箱を憎しみたつぷりにグシャリと潰し、心の準備も出来ないまま僕はバイト先に電話をかける。

ブルブル、とテンプレート通りの無機質な機械音が流れる。

いつそバイト先に隕石でも降ってこのまま誰も出なかったならどれだけ救われるだろうか。いや、生活は危うくなるが。

そんなことを考えているとガチャ、という音がして向こう側から声が聞こえてきた。

この声は店長だな、よし謝ろう。土下座モードだ。すみません店長

僕です。寝坊してしまいました今すぐに向かいます本当に申し訳ありませんあと20分で着きます。

僕はマシガントークでとにかく謝った。

電話の向こう側から深い溜息が聞こえる。

もう一言ぐらい謝っておこうと声をだそうとした瞬間、店長は君はもう来なくてもいい、今月分の給料はちゃんと振り込んでおくから安心しろと僕に告げ、一方的に電話を切った。

隕石が落ちようが落ちまいが、僕が職を失うことはもう決定事項だったようだ。僕はベッドの上で電話を持ったまま茫然としていた。なにも初めての寝坊で首を切ることはないだろうと思ったが自分が悪いことには変わらない。

幸い今までのバイト代は貯金していたので何もせずとも2ヶ月は生きていくことはできる。

すぐに新しいバイトを探せばなんとかなるだろう。

よし、まずは煙草を吸って落ち着こう。

そう思い再び枕元に手を伸ばすがそこにあるのは見る影もなく潰された煙草の箱だけだった。

ああちくしょうそうだった、煙草は切らしていたんだった。

僕は仕方なくベッドから落ちるようにして這い出し、着替えて新しいバイト先を探しに町へ出ることにした。

僕の住む町は僕がバイトを首になったなんてことはおかまいなしにいつもと変わらないままだった。

僕が何をしたって世界は変わらない。僕に変えられるのは精々あの四畳一間の部屋の中だけだった。ああ、なんて自分はちっぽけなんだろう。いつそ服を来た兎がやって来てマンホールの中にでも飛び込んで不思議の国のキチガイパーティーの仲間入りをして一生を過ごせたならどれほど楽か。なんてありえないことを考えながら駅前を目指す。

駅前には相変わらず多くの人で賑わっていた。雑踏が自分のちっぽけ

さを笑っているようで、僕はとても孤独なんだという気にさせた。そんな思春期の中学生のような思いを頭から振り落とし僕はアルバイト募集情報の載ったフリーペーパーを手に取り、駅前のマックに向かう。

フィッシュバーガーセットを頼んで待つこと1分。おまたせしましたと店員が言いながら注文通りの品物を持ってくる。僕はそれを持って出口近くの席に座り、フリーペーパーを開く。

コンビニ、居酒屋、ティッシュ配りなどいろいろなアルバイト情報が掲載されている。

ああどうしようか、やっぱり深夜コンビニが安定だよなあ。時給いいし。

とりあえずお気に入ったバイト先のあるページに片っ端からドッグイヤーをつけつつ、僕はポテトを貪り食った。

ポテトを平らげ、フィッシュバーガーに手を伸ばす。

それを5口ほどで食べ終わり、飲み物を一気に飲みして僕はマックを後にした。

もう夕方か、とりあえずバイト先候補への電話は明日にしておこうか。

そう思い、今日は久しぶりにゆっくりすることにした。

駅前のコンビニで雑誌を立ち読みして帰ることにしよう。

今日だけは、何も考えずやりたいことをしよう。

そう決意してコンビニへ向かう。

そこで手に取ったのは人気の週刊マンガ雑誌。しばらく読んでいなかったせいで連載作品はだいぶ様変わりしていた。ええ、なんでこいつ敵になってんの？え、あいつ死んだの？あの作品終わっちゃったのか。

読みながらどうでもいい情報が頭に流れ込んでくる。読み終えて、またほかの雑誌に手を伸ばす。それを繰り返した。

そのうちふと後ろを向くと店員が迷惑そうな顔でこちらを見ている。まあ仕方ない、そろそろ撤退してやるか。なんて心の中で偉そうに

しながらレジに向かう。

店員に煙草の番号を伝えて300円ちょうどを出し、受け取って外に出る。

外はもう暗くなっていた。

今日はもう、仕方ない。明日から頑張るぞ！

そう考えながら幸運のジんクスの煙草を開ける。

そこから一本取りだし、啜えて息を吸いながら火をつける。

一日ぶりの煙草の味は美味かった。脳が痺れるようだ。

心の中のイヤなものを全て煙と一緒に吐き出した。

これで、明日からも頑張れる。僕は幸運の煙草を眺めつつ、そう思った。

すっかり暗くなった夜空を見上げると、煙草と同じ名前の星が輝いていた。

（後書き）

携帯から使うの難しいですね。慣れかな。
終わります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0636m/>

ななつぼしとぼく

2010年12月19日04時29分発行